

## 時を繋ぐ土間

石川 文子 (福岡市博多区)

七月になれば勢い良く山笠が疾走する御供所町の一通道路。門構えなど無く、道すぐ家の道路に面した玄関を開け、薄暗い中へと一歩、二歩、三歩・二十歩目によやく本来の我が家へと辿り着く。これだけ読んでもどんな住まいなのかピンとはこないであろう。そもそも我が家は明治の終わりに建てられた町屋作りと呼ばれる日本家屋である。間口が狭く鰻の寝床のように細長い、表と裏(そう我が家では表現される)の二軒家から構成されている。私は裏の我が家へと続く、薄暗くどこか奇妙なこの土間が好きなのである。

見上げれば思わず背筋を反らせてしまう高い天井。それを支える微妙に流線を描いた、厚く太い梁。釉薬がしっとり馴染み、黒く艶やかな柱は夏でもひんやりとした心地にさせてくれる。どこか温かみを含んだ土の壁。玄関を開け放つと、すっと風が滑り込むように裏へと吹き抜ける。日本の四



古い民家には、心の安らぎを感じる日本の原風景がある。ひんやりとした薄暗い土間に足を踏み入ると、迎えてくれる何かがある。「土間」を心の景観として捉えた作者の感性を評価したい。一度訪ねてみたくなる御供所の町屋である。

(選考委員 中村 敏子)

季が百度あまり通り過ぎ行く様を見つめながら、途中、空襲の炎さえも潜り抜け、ひっそりとした中にもどろりとした佇んでいる。彼は何を思っているのであろう。彼は何かしら旧友と語りあっているようである。それは時として、かつて、釜戸にくべられていた炭の残りであったり、備付の水屋とその内に潜む食器や雑貨であったり、井戸の水を汲み上げるモーターの音かと思われる。人が居ない隙を見て、彼らは時折くすくすと笑っているかもしれない。巡り巡る人の命の儚さを。

「時代に取り残された家」という人もいるが、「時代の中を生き抜いている家」と呼んで欲しいものである。表の玄関の先に見える、眩しさにちよつと目を細めたくなるような、光溢れ移りゆく外の世界。彼を媒体として、過去と未来が融合されていくような気がする。

## 第8回福岡市景観エッセー

## それぞれの故郷

澤井 裕美子 (福岡県太宰府市)

人は誰でも自分の故郷を常に身近に感じたいものだ。

私は生まれてこの方、ずっと福岡で育ってきた。細かく言うなら太宰府だけれど。ところで、福岡市と太宰府市。この2つの市にながりがあった、ということを知る人は少ない。

昔太宰府の地に流された菅原道真は、元中央区の薬院新川に映る自分の変わり果てた姿に嘆いたという話が残っているが、その謂れで建てられたのが、アクロス福岡前にぼつんと佇む「水鏡神社」(中央区天神一丁目)である。私はこの神社の前に来るといつも、ふいに境内に入ってみたくなる。そしてその一角に入ったとたん、さっきまでの都会の空気が急に故郷の風にかわるのだ。私はこの瞬間がとても好きだ。後ろを振り返ると、静かな鳥居の向こうに青空に照らされたアクロスのモニュメントがキラキラと輝いている。

今年3月に新しく生まれ変わった岩田屋。



次々と建物が更新される福岡の街の中で、ビルの谷間に吹く故郷の風はしだいにその通り道を失いつつある。この「福岡市の魅力」を発信した以上、これを未来にも伝えていきたい、そのことを考えさせてくれたエッセイである。

(選考委員 西山 徳明)

昔そこがNHKの跡地だったとは想像さえできないくらい、きらびやかに変身した近未来都市に色とりどりの若者が集まっている。つい最近まで、東京にしかなかった店々が、そのあちこちで見つけられるようになった。しかし、ちよつと足をのばし大名の路地に入ってみる。また急に空気が変わった。古びた赤レンガが続く大名小学校、厳かな印象さえ受ける上久醬油、西通りに続く紺屋町はまさにむかしの職人の町そのままの姿でそこに存在している。さっきまでの風景とミスマッチなようで、なんだか妙にしっくりきている。無造作に置かれた自転車さえその風景に溶け込んでしまっているかのようだ。ここにもまた、誰かの故郷が隠れているにちがいない。

都会と故郷、まるで対極のような感じがして、それでいてそれが不思議に同じ場所に共存している都市。それこそが、福岡市の魅力なのだと思う。